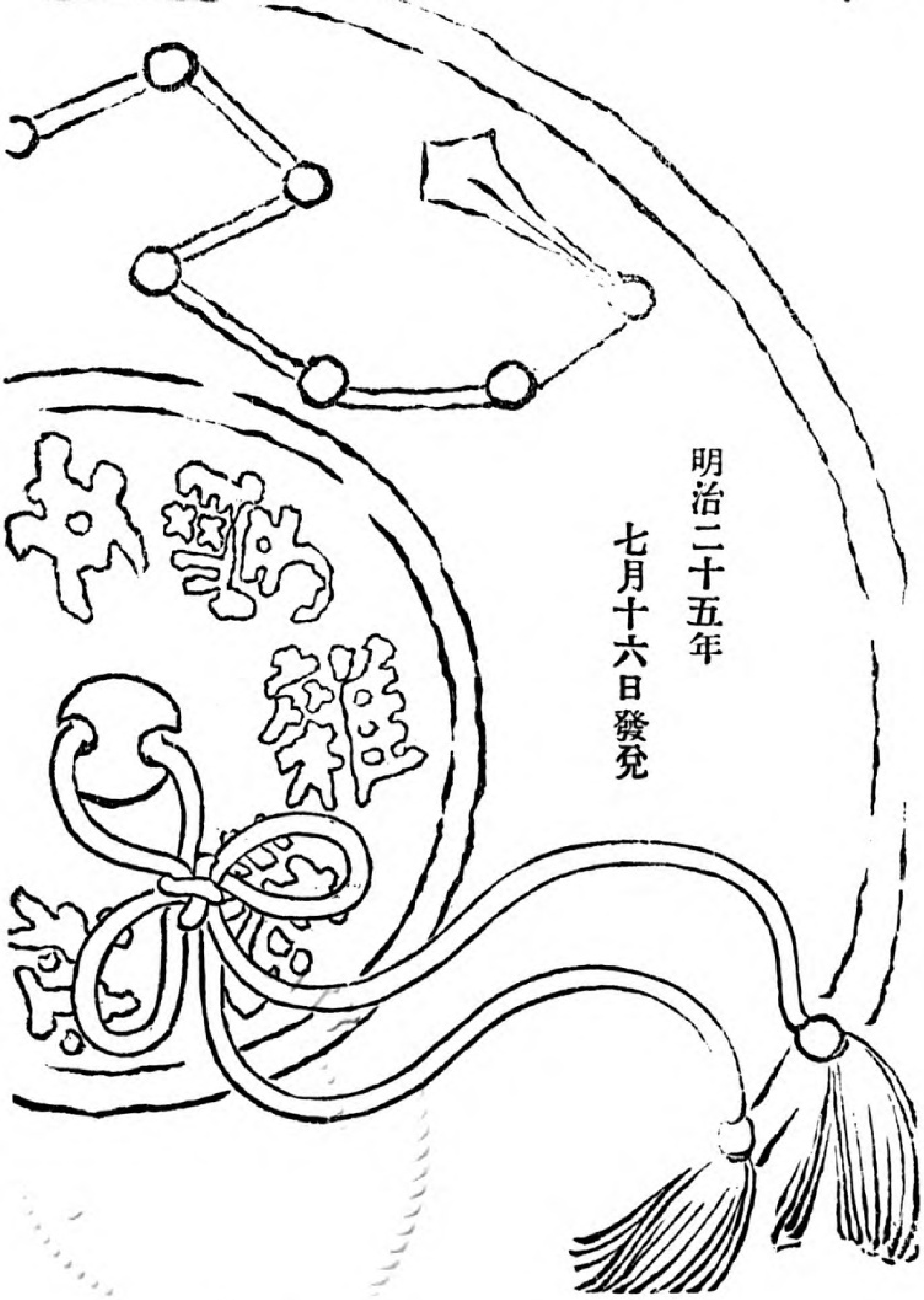
女學雜誌

第三百二拾三號

甲の巻



明治二十五年七月十六日發兌

注意

社說 裝美魔は、美術的功利論、器械的美術論、美の本領の三段に分ち、九鬼隆一君の美術演術、及び音樂學校の唱歌奏樂を評し美の眞髓を保護顯正せり。德川時代における平民的理想の第二は粋及び侠に論入して彌よ精緻深刻を極む新博士猪子吉人君と題する一篇は博士が舊友無名氏の呈書にして情深し批評欄内に於て、曩の日の小說「星夜」の主人公となりし男、作者に向つて不平を寄せ、作者亦た之に答へ、男亦返す、面白味多し。時事欄内に大ひに警告する一文後藤伯邸後の一貧家は世上志士の注意に價ひすべしと信ず。

July 1892
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 323. July 16th. 1892.

EDITORIAL:—Beauty that is not Beauty.

LEADING ARTICLES. Democratical Ideals under the Tokugawa Reigne. To the New-made Doctor of Medicine, Yoshindo Inoko.

NOVEL:—"Otome."

LITERARY.—"Zuien shiwa" (A Criticism of Poetry in Chinese.)

CRITICAL NOTES.—"Hoshiyo."

TOPICS OF THE DAY.

SUPPLEMENT.

本號(第三百廿三號)目次

○社說　裝美寬（美術的功利論。器械的美術論。美の本領）

○論說　德川時代に於ける平民的理想(其二)透谷子。○新博士猪子吉人君(天知子)

○小說　乙女（は、あ）

○文藝　隨園詩話の數節（無名氏譯）

○批評　脫蟬子に與へて其「星夜」を評す（星夜の主人公さなりし男）○脫蟬子の答○又の答（星夜の主人公ならざりし男）

○時事　後藤伯邸后の賞家

○附錄　教育學

前週(第三百廿二號)赤表

●社說　卒業后の女學生

●史傳　ワシントンの母

●小說　燒番人（下）ひさご女史

●雜錄　花婿さ花嫁の歌（大西祝君作）○女學校本科の學科につきて(櫻井ちか子)○さとりの歌(湖東生)○佛壇前の婚姻

●家政　洗濯の數○衞生金言

●寄書　ワシントンの傳

●女報

前々週(第三百廿一號)白表

●社說　立憲帝國政論家

●論說　德川時代の平民的理想(透谷)○郭公詞(無名氏)

●小說　星夜(脫蟬子)

●批評　奴の小万(天知子)○關原合戰圖志○匏庵十種

●雜錄　田舍歎(方寸子)○閑文字（若中の樂、等阿法師法語、譯詩）木子○天地管見(其心に恥ぢず、名譽に掛念せず、智及德)六合學人○

●時事　朝鮮問題○新聞紙上外交論○司法大臣○鐵道會議○國民協會○教育者を教訓せざる可らず○

●寄書　按摩術を以て盲者特有の業さなすの議（中川恭次郎）○當時の文學界を見て（悠々庵主人）○靑年の責任(森溪生)

●片々

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百廿三號　明治二十五年七月十六日發兌

社説

美術的功利論（上）

装美魔

喩えば、僞判を作りて金を竊むと、從五位の名を冠ぶりて利を貪ぼると、功利の念に於て違がふところありや。世の法律は曲穿として之を異なるとせん。左れど、道義の眼もて之を照さば、一視同惡たり。況してや、美術上の鑑識に於て斯の如き事類を見ば、其装ほふといよ／＼巧みなるにつれて、其醜惡なると、更にいよ／＼太甚しからん。

美人何んぞ利を言はん、唯だ美あるのみ。彼等が利を言ふは、君子が算盤を彈きて后ち義に趣むくに似たり。美を愛するものは、當に美その者を愛すべし、美を愛すと云ひて、而も其心、利に在る者は、之を敵目美人となす。

世上滔々たる先覺の輩、何をもて正しく見ず、偏より見るとの如此き多きや。學人は學を愛するにあらず、愛する所ろのもの他にあり。愛國者は國民を愛するにあらず、愛する所ろのもの他にあり。如此く、美人の美を愛するも亦た、愛する所ろ他にあり。他とは何處ぞや、曰く利なり。利は彼等が到底の目的にして、其稱ふる所ろは、假つて利用するの方便に過ぎず。此に於てか、學術的の功利論あり、愛國的の功利論あり。美術的の功利論も亦た斯の如くし起てる。

揚々として説法する人の曰く、漆器は我國の重寶なり、陶器は我國の特有産物なり、文人畫は萬國に類なき所ろなり、大ひに隆んならしめて、以て大ひに輸出せざる可らずと。此の愛國論に似たる一種の美術論は、其聲と共に功利論を吐き散らし、眞粋の美を根底より腐敗せしむ。如此き論者は職工學校に長たるべし、斷じて美術學校に長たる可らず。

又曰く、日本の美術は方今万國に卓越せりと。吾黨は憾を遺して此種の迂論に反對せざる可らず。日本の、繪畫、日本の彫刻、日本の建築、日本の唱歌音樂、日本の詩歌、果して能く万國に卓越せりや。日本には精巧緻密又は瀟洒落々たる珍奇の美術品なきにあらず、而して此の美術品、或時限に於て濃厚なる人種の好奇心に投合せざるにもあらず。左れど、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此種の美術品を以て、最とも高尚ある美の觀念を發揮したるものなりと認むるは迂卑の見識たり。

吾黨は、嘗て、音樂學校長が國家主義を盛んに主張せらるゝを聞き、其のピアノ、オーガン、ヴワイオレンの類を如何にせらるゝかを掛念したりき。左れど幸にして、其國家主義も此邊に於て調和する所ろありしは、祝す可き也。

九鬼隆一君の繪畫の演說に至りては、頗ぶる心配せられたり古の寶物を取調べ且つ大切にする為には、保守論は頗ぶる適當せりと雖ども、今后に繪畫を奬勵し、日本をして眞正の美術國たらしめんには、同君の保守論の如きは少なからぬ防害を爲すものと思はれたり。(女學雜誌二十二年六月印行第百六十六號、繪畫に於ける國粹保存主義參觀)。然るに近日、油畫流の人々と同君とに於ける衝突の如きは、果然、此の防害の追々過度となりたるに由縁せずや。

我國の畫人をして悉とく日本從來の畫流に泳がしめんとするは、單に美と云ものゝ眞髓を悟らざるのみならず、又、國勢流向の當然なる大勢をも辨知せざるの處置なり。

畫くべきものゝ中の太はだ高尚なる畫題、人◎。及び、人の中の尤とも高尚なる畫題、面◎貌◎風◎相◎等を畫くとは、毛筆畫の短所なり。遠近高低相映じ、淺深大小相對し、森羅万象自づからに比較し、以て和然たる自然の大調和を示したる天地一幅の大畫題を寫すとは、毛筆畫の短所なり。色彩造りものめき色の相自づと自然實際のものに違ふと及び、十九世紀西洋の文具を用ひず、反つて紀元前東洋の遺物を使用せんとするは、皆な毛筆畫の短所あり。然るに、此の短所多き毛筆畫を擧て日本特有の國粹なりとし、永久唯一に之を主張して、世界大勢の好技術を擯斥するに至りては、遂に困陋偏僻の誹りを免かるゝと能わざる也。

要するに、美を愛するものは、當に美そのものを愛すべし、美を愛すと云ひて而も之を實用するの目的を先にするものは所云る美術的功利論者なり。美術的功利論は、一見して頗ぶる美なるが如けれど、而も尙ほ功利論たるを免れず。功利論は利を主旨とす、眞正の美術論は即はち美そのものを本旨とすべき也。

(中)　器械的美術論

美の能く美たる所以の一は、其の物外に逍遙し、規矩法則の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

束縛を沒し、漂渺滄溟として捕捉しがたきの狀あるによる。喩へば、蛟龍の出沒して全躰を露わさざるが如き、天女の率然として降り亦瓢然として去るが如き、變幻端睨す可らざる所ろ、こゝに美の天使は棲へり。

故に或人は歎じて言ひぬ、十九世紀の文明は美を殺せりと。文明豈に美を殺すものならんや、但だ、唯物器械的の現象は往々にして美の出現を杜絕するもの也。

學者と云ふ一種族さまぐ\に考を立てゝ言はく、戀愛とは、頭腦の某の部分が刺激せられたる時の感覺なり、義に勇むとは細胞球內の變化云々ありしときの感覺なりと。彼等は秦の始皇帝の如く、古來の哲見を燒き盡して、規則を以て万事を辨じ了へんとす。其迂論二世につゞくべしとも思はれず。

ベツーベン云へり、美を發揮する人の手は、慈善を爲す人の手の如し、右の手の爲す所ろ、左の手之を知らざるに至りて初めて名手たり、と。所云る無意識は、意識あるものゝ發達せるなるか、今ま之を辨ずるとを要せず。今の無意識は即はち無意識にして、規矩法則に束縛せられざるの謂ひなり。美を發揮する人、こゝに至らずんば未だ妙地に達すと云ふ可らず。

吾黨、音樂學校の唱歌及び音樂を聞く每につねに痛歎す。其聲音の調、よく時に中り、律呂整然として調ふ。もし物理及び生理的の學理より評下せば、今の音學學校の樂は驚ろく可き進步を爲したりと云へど、美の眞髓に入りて其緊要肝切の所より窺がふときは、憾むべきもの大ひに存す。吾黨は其の唱歌を耳にて聞き、其音樂を奏する手の巧みに動くとを見たり。耳目は之によりて感動するとあれど、心衷の一と度びだも動きたるとはあらず。夫れ、胸喉よく音を發し、齒舌よく之を調ふ、其音の口端より飛んで空中の聲となり飛揚するや、何如にも規律に適合し、調子に好乘せり。左れど。音樂中の音樂たる此の唱歌手の聲は、單に音を響かするのみにして、靈想を躍らすことなし。其一致はあり、其調和はあり、たゞ道德上のエキスプレッションに至りては空然として欠く。之れ、聽者の耳を喜ばすに足りて、甚心を滿たしたる能はざる所以にあらずや。其音樂に至りては、盲人が箏を彈ずると何等の差違ある。指よく躍り、手よく動き、万化千變の巧妙を盡すとも、必意手指と云へる肉ある器械を以て、樂器と云へ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る弦ある器械を打つに過ぎず。其音は鳴り響くのみ。未だ曾て心臓鼓動の電氣を感發するにはあらず。

吾黨は平素、人の聲なるものを輕んずるを憾みとす。夫れ聲は靈の人なり。皮膚、全身を包み、全身、骨肉にて塞がる、此間を透射して發出すると、喩へば、湶涓たる一道の溪流、鬱岩積土深谷草蒙の下をくゞりて玉を輕じて清水を地上に噴出するが如く、遂に、喉を離れ、齒を通して、廣漠々の天地たる、日光射、上帝在ます所ろの現世界に飛揚快出するものは則はち人の聲にあらずや。聲は、心中の心を乘せ、情裏の情を包み、脱然ぬけ出で、四門八關に抑へらるゝとなし。聲は豈に、人の尤とも眞實なる代表者にあらずや。否な代表者と云はゞ寧しろ不可なり。聲は人の眞靈なり。思ふに聲の發して外に遠征するや、第二聲の未だ發せざるに當りては、人の全心皆な第一聲の裏にあり。此の聲なくんば則はち人なし。神、土泥の人に息氣を吹込みたり、息氣は即はち神の聲か。人の聲は此の息氣より成る。息氣は即はち生命なり、聲は即はち人の生命なり。

故に、心臆より發する聲は、能く心中の秘密を發表す。此に於てか、君子の聲は温厚なり、賢者の聲は爽利なり、達人の聲は濶如たり、姦者の聲は佞曲なり、惡人の聲は寒烈なり。其他、義俠者、弱志者、虚欺者、大言者の輩一々其聲を異にす。よく人性を弁知するものは、目を閉ぢて相を見ず、たゞ聲調を聞きて人を鑑識するは之が爲め也。

吾黨、談話して君子の音を聞かざるや久し。贊美の歌を聞くとき、屡々此の感あり。音樂學校の唱歌を聞くに至りて尤とも此の恨みの深きを覺ゆ。あゝ、何んぞ眞實、純厚、高潔、聖妙なる音聲の聞ゆると如此く乏しきや。耳を欹てゝ東風を聞く、世上寒寂として靈音靈聲なし。

吾黨は音樂學校に望を屬すると深し。故に如此く直言す。此論文に於て主張する所ろ、之を漠然の事と云はゞ即はち漠然なり、何んとなれば如此き事は、樂譜を指示するが如く明白に指示すると能はざればなり。然れども、世上眞とに音樂唱歌に關心すると深き高潔の達人あらば、恐らく此の論文が呈する所ろの獨言を甘受すべしと信ず。

此弊を矯むるの道はもとより存す、之にたゞ一つあり、他なし、音樂學校の修身科を嚴正高潔にするを是れ也、而して歌

手樂人の心を高大ならしめ、其天職を自重せしめ、其一唱半彈の深く名敎に關することを覺悟せしむるにある也。たゞ彼の物理的の講釋に偏し、人の聲を生理的の發現に全歸し、人を擧て、生ける音樂器械と爲し了るが如きは、實に音樂學校を殺すに均し。

（下）　美の本領

美の世界は理想の世界なり、逍遙遊の世界なり、樂園を失ひたる人の復樂園なり、天人和合し四海同胞同遊するの公園なり。アレキサンダーの侵畧に對しては、願わくは唯だ此の一つを遺せと願わん、集會及言論の法律に對しては、唯だ此の一つを許せと願わん、之を願ふが爲めには吾黨は屈服すべし。唯だ夫れ、眞と共に美を知り、且つ眞に美を味はふものは、眞と善とを同時に知味するものにあらずんばあらず。必ずしも、美の意識に、眞と善とを對觀すとは云はず、然れども眞人にあらずんば、眞正に美を味知すること能はず、而して眞人は必らず、善と眞とを兼ねざる可らざるが故に、此等の素養なきものは、遂に美を知ること能はずとは云ふ。

歌よみに俗物多く、風流者に無風流者多く、美術者に放蕩人多きは、其人眞と共に美の美たる神髓を捉へず、たゞ其の形骸に泥戀して、私慾私情を滿足するの過ちに由緣す、彼輩の所云る美の愛は、詮する所ろ一種の功利に過ぎず、彼輩の誇る所ろの美の術は、遂に一種の器械用作に過ぎず、美の心を得ずして美の肉を抱き、美の靈を發揮せしめずして、其骨を露はす。あゝ去れよ、去れよ、當今何んぞ如此き美人の蠢々として多くうごめくや。

美人は人の美なるもの也、心先づ美ならずんば、其聲何んぞ美ならん、其技亦何んぞ美たることを得ん。今の美育に於て欠くる所ろのものは、他の種の敎育に於けると同じ。即はち、たゞ技藝の末に走りて、本要の修練に省りみず、心を殺いで、技を長じ、人を殺して、藝を活かす。あゝ美の世界は最后の世界なり、此の世界にも尙ほ功利と規則とを侵入せしむれば、吾黨は全敗したる也。吾黨の士、何んぞ慷奮せざる。

荀子曰く、聲樂の人に入るや深し其の化するや速なり故に先王謹で之が文を爲せり。樂中平なれば則ち民和して流せず、樂莊なれば則ち民齊ふて亂れず、民和齊なれば則ち兵勁く、城固く、敵國敢て嬰せず、是の如くなれば則ち百姓其處を安んじ其鄉を樂みて以て其上を足さざるなし、名聲此に於てか白に、光輝、是に於てか大なり、四海の民以て師と爲ることを得んことを願はざるなし、是れ王者の始なり。

論説

徳川氏時代の平民的理想（第二）

透谷子

老人は古へを戀ひ壯年は己れの時に傲る、戀ふるものは戀ふべきの迹透明にして而して後に戀ふるにあらず、傲る者は傲るべき理の照々たるが故に傲るにあらず。彼は「時」に欺かれ盡くして古時を思ひ、これは「時」に弄せらるゝを知らずして空望を懸く。氣盈ち骨剛きものすら多くは「時」の潮流に卷かれて五十年の星霜急箭の飛ぶが如くに過ぐ。

然れども社界の裡面には常に愀々の聲あり、不遇の不平となり、薄命の歎聲となり、憤懣心の慨辭となりて、噴火口端の地底より異樣の響の聞ゆる如くに吾人の耳朶を襲ふを聽く。まことや人間社界ありてより以來、チスコンテンションと呼べる黒雲の天の一方にかゝらぬ時はあらざるなり。

凡そ社界の組織封建制度ほど不權衡なるものはあらず、而して徳川氏の封建制度極めて完成したるものなりし事を知らば社界の一方にチスコンテンションの黒雲も亦た彼の如くに廣大なりしものあらざりしを見るべし。その不平の黒雲の尤も多く宿るところは尤も深く人間の靈性を備へたる高尙なる平民の上にあり。訶諛佞辨をもて長上に拜服するは小人の極めて爲し易きところにして高潔なる性格ある者に取りて極めて難しとするところなり。もし今よりして當時の平民の心理の實情を描けば、あはれ彼等は蠖蟄の苦を甘んずるにあらざれば放縱豪蕩にして以て一生を韜晦し去るより外はなかりしなり。一種の虛無思想彼等の心性上に廣大なる城郭を造りて彼等をして己れの靈活ある高尙の趣味を自殺せしめ、希望なく生命なき理想境に陷沒し入らしめたり。

天知子其の平生深く自信する精神的義俠の靈骨を其の鋭利なる筆尖に迸らしめて曰く、社界の不平均を整ふる非常的手腕として俠客なるものは自然に世に出でたるなりと、又た曰く反動激發せる火花の如きものは俠客の性なりと。天知君の俠客論精緻を極めたれば我が爲めに其の性質を論評すべき餘地を餘さず我は唯だ我が分に甘んじて文學的に徳川氏時代に平民者流の理想となりし俠と粹とが如何なる者なるべきやを觀察するの榮を得む。

わが徳川時代平民の理想を査察せんとするは我邦の生命を知らんとの切望あればなり。山澤を漫渉して溪澗の炎夏の候にも涸れざるを見る時に我は地底の水脈の苟且にすべからざるを思ふ、社界の外面に顯はれたる思想上の現象に注ぐ眼光は須らく地下に墜下して幾多の土層以下に流るゝ大江を徹視せん事を要す、徳川氏の興亡は甚しく留意すべきにあらず、然も徳川氏三百年を流るゝ地底の大江我が眼前に横たはる時、我は是を觀察するを樂しむ、誰か知らむ、徳川氏時代に流れたる地下の大江は、明治の政治的革新にてしがらみ留むべきものにあらざるを。

我が觀察せんと欲する大江は其上流に於ては一線なりしかども末に至りて二派を爲せり。而して其濕ほすところはナイル河の埃及に於けるが如くに我邦の平民社界を覆へり。

われ常に惟へらく至粹は極致の翼にして天地に充滿する一種の精氣なり。單だ至粹を嚮へて之を或境地に箝むるは人間の業にして時代なる者は常に其の擇取したる至粹を歷史の明鏡に寫し出すなり。至粹は自ら落つるところを撰まず、三保の松原に羽衣を脱ぎたる天人は漁郎の爲に天衣を惜みたりしもなほ駿河遊びの舞の曲を世に傳へけり。彼は撰まず然れども彼の降りて世に入るや塵芥の委積するところを好まざるなり、否塵芥は至粹を駐むるの權なきなり、漁郎天人の至美を悟らずして徒らに天衣の燦爛たるを吝む、こゝに於てか天人に五衰の悲痛あり。至粹の降るところ、臨むところ時代之を受けて其時代の理想を造り、その時代を代表するもの之を己が理想の中心となす。自由を熱望する時代には至粹は自由の氣となりて、ウィリヤム、テルの如き、代表者の上に不朽なる氣稟をあらはし、忠節に凝れる時代には楠公の如き、はた岳飛張巡の徒の如き、忠義の精氣に盈ちたる歷史的の人物を生ずるに至るなり。ピユリタンの興らんとする時に至粹は彼等朴直なる田舍漢の上に望みて千載歷史上の奇觀をなし、獨逸に起りたる宗敎改革の氣運の漸くルーテルが硬直誠實なる大思想に熟せんとするや至粹は直ちに入つてルーテルの聲に一種の靈妙なる威力を備へたり。

至粹は時代を作る者にあらず、時代こそ至粹を招きて自ら助くるものなれ。豪傑英雄は特に至粹のインスピレイションを享る者にてあれど、シイザルはシイザルにて拿翁は拿翁

たるが如く至粹を享くる量は同じくとも其英雄たるの質は本然に一任するのみ。」時代も亦た斯の如し、時代には繼承したる本然の性質あり、之に臨める至粹の入つて理想となるは其本然の質を變ふるものにあらず。族制々度の國には族制々度の理想あり、立憲政躰の國には立憲政躰の理想あり、若し支那の如き族制に起りたる國に自由の精氣を需め、英米の如き立憲國に忠孝の精氣を求めなば人は唯だ其愚を笑はんのみ。シドニイ、スペンサーの輩は好んで其理想する所に從ひてシバルリイ(俠勇)を謳へり。然れどもウオーヅオルス、バイロン輩の時に至りては是を爲さず、時代既に異なれば至粹も亦た異なれり、同じく理想を旨とするものにして其詩眼の及ぶところ其詩骨の成るところ各自趣向を異にす。頃者我文學界は俠勇を好愛する戯曲的詩人の起るありて、世は雙手を擧げて歡迎するなる趣きあり、俠勇を謳ふの時代未だ過ぎ去らざるか、抑も他の理想未だ渾沌たる創造前にありて、未だ何の形をも成さゞるの故か、借問す沒却理想の論陣を布きながら理想詩人ドラマチストに先ちて出でんと預言し玉ひし逍遙子は如何なる理想の活如來をや待つらむ。

德川氏の時代に平民の上に臨みし至粹は如何なる理想となりてあらはれしや。我は前に言へりし如く二個の潮流あるを認むるなり　その源頭に立ちて見る時には一大江なり、其末流の岸に立ちて望めば二流に分れたり。普通の用語に從ひて我は其一を俠と呼び他を粹と呼ばむ。

何れの時代にも預言者あり、大預言者あり小預言者あり、其宗敎に其思想に彼等は代表者となり嚮導者となるなり、彼等は己れの「時」を代表すると共に己れの「時」と繼ぐべき他の「時」を嚮導するなり。イザヤは其慷慨凛慄なる舌を其「時」によりて得たり、而して其義奮猛烈なる精神をもて次ぎの「時」の民を率ひたり、カアライルの批評的眼光を以て覗へば、預言者は其精神を死骨と共に棺中に埋めず巍然として他の「時」に甦活し、無聲無言の舌を以て一世を號令するものなり。古昔の預言者は近世に望むべからず近世の預言者は文字の人なりと言へる、己れ自ら一預言者なるカアライルの言を信ずるとを得ば我は德川氏時代に於ける預言者を其思想界の文士に求めざるを得ず。然り何れの時代にも或一種の預言者あるとを疑はざれば我は文士を以て最も勢力ある預言者と見るの外

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なきなり巣林子戯曲ありてより。浮世を難波の潟に、心中するもの、數多くなり、西鶴一流の浮世好色小説の流布してより社界の風儀は大に紊亂せる事識者の共に認むる所なり。いざ是等平民社界の預言者に就きて、その至粹を招きて理想となしたる跡を尋ねて見む。

今代の難波文學は僅かに吾妻の花に反應する仇なる面影に過ぎざれども徳川氏の初代に於て大に氣焔を吐きたるものは彼にてありし。江戸に芭蕉起りて幽玄なる禪道の妙機を闡きて主として平民を濟度しつゝありし間に、難波には近松巣林子出で、艶麗なる情筆を揮ひて一世の趣味を風靡したり、次いで西鶴其碩の一流立ちて艶道の魔風限なく四方に吹き廻れり。茲に至りて難波の思想と江戸の思想と其文學上に現はれたるところを以て斷ずれば各自特種の氣禀を備へて容易に蹤跡し得べき痕を印せり。後に難波に起れる文士の多數と後に江戸に起れる文士の多數とを取りて撿するに、同じく混和すべからざる異色を帶びしこと一點の疑を挿むべからず。不知庵主が評して不朽の戯曲家と言ひたる巣林子をもて假に江戸に生れしめばいかならむ、深く儒家の道德に觀得するところありて加ふるに己れの自家の理想を以てしたる馬琴をして難波に生れしめばいかならむ。われは兩家其位地を顛動すべしとは信ぜざれども必らず其產出の上に奇異の現象を生じたりしとを疑はず。難波にては豊公の餘威全く民衆の腦髓を離れずして徳川氏の武威深く其精神に貫かず、從つて當時の難波の潟に湧きたる潮の跡を問へば、寧ろ武勇の精神を遺却して、他に柔弱なる一種の精氣の漸く成熟し來れるを見るべし。ひとり一時の境遇にてしかくなりしにあらで關西の氣質と關東の氣質とは自ら異るところなり、宜なるかな俠勇を好みし京傳馬琴の徒の關西に出でずして關東に起り門左西鶴等の關東に生れずして大坂に現れたるや。奇なるかな一は俠勇を尊び一は艶美を尙びて各自特異の旗幟を樹てたるや。その始めは共に至粹の宿れるなり、啻だ一は之を俠勇に形成し一は之を艶美(所謂粹)に形成したるの別あるのみ。

右は難波と江戸との理想の異色を觀察したるのみ、元より俠と言へば江戸に限り粹と言へば難波に限るにあらず、われは爰に預言者の聲を吟味し、その代表する「時」を言ひたるに過ぎず。

新博士猪子吉人君

天知子

菌黴學者の若武者として、勉強不屈の優等生として、後世恐るべき熱心家として、殊に年若き博士として、此頃榮譽社會に雷名を轟かしたる醫學博士猪子吉人君、君は余を知るか余は猪子博士を知らず、然れども布衣の猪子吉人君は實に余の知友なり、君と聖堂の月に手を携へて吟嘯し、青年壯夢に後來を期し、斷琴の盟を爲して胸襟を披き、別離の情戀々として去れども去り難く、万感を寫眞の幻影に描き、終に後來を談じて其趣く所を異にせり、當時此二少年が胸中を描き出せしもの實に文天祥が杜貴卿を見て吟ぜし慨詩に似たり、彼れ吟ずらく、昔し魏公子に趣き今霍將軍に事ふ、世態炎冷甚し交情貴賤分る、黄沙暮靄を揚げ黒海朝氛を起す、獨り君と手を携え行吟して白雲を看ると、噫回想すれば既に十四五年、君も堂々たる一個の好丈夫となれり、昨夜牛が淵の水魔眠れる所、靜かに淀む月を見て端なく此好丈夫の幻を見る、月は眼のみにて見るものかわ、余が至愛は終に變轉して竹馬舊友の上に發作し、蒸發し、凝結せしなり。

君は學士搖籃の優等席を余と屢々爭奪せる好敵なりし、而して又君は余の手を握りて最も親情を表せし好友なりしなり、君は寡言にして溫厚なり、而して活潑にして勇進の氣慨あり、殊に固有の勉強心は百難を排して殆んど木强漢の觀あらしめたり、其「修學中は豫め疎遠を謝す」と唱して情の世界を冷視せしに至ては、悚然として戰慄せしめぬ、君は又平和の人なりし、而して解剖的の眼光を有して寧しろ濶達的ならざりし、然れども余が日本の經濟界に注目して慨嘆する所ありし時君は最も熱心に同意を表し且贊助せり、而して余が商業社會に潜伏探究せし時も、余が經濟の要は山林にありとして靜かに農科大學に蟄伏せし時も、余が師範校内に教育書を繙きし時も、余が漢英の文學を校舍に研究せし時も、君は毎に兀々として顯微鏡下に精氣を注ぎ、人間情を其學に犧牲として、凹狀目鏡の度を減じつゝありしなり、君は深く進めり余は寧ろ進まず、而して君は物質世界に於ての全勝者にして、余は物質世界の不平狂者なりし、君の働き塲は君の技倆に最も適合せしが故最も發達するを得たり、余が働き塲は毎に不格好にして手足を延る能はざる感ありし、而して終に其捕へ難き疑

問を捉えて一の眞理を發見するを得たりしなり、爰に於てか余は終生大安心の中に愉快の働きを爲すの人となりぬ、余は君に誇る所のもの唯一あり、人間光明界の道是れなり、靈界の書生として萬事の泉源、人世の趣味、人間至愛の妙機を知りたると是なり。斯說き來る所を以て見れば、君が特色は眞に『學者』に於て認むるなり、學者の資格に生れたるを認むるなり、勉强の二字は實に君が半世の歷史を組立てたる者なるを信ず。

君が此非尋常なる榮譽を得たりしものは、果敢なき名譽を目的として勉强せし結果に非ざるなり、滔々たる薄弱書生多く利の爲めにし名の爲めにす、未だ學ぶ所の學趣味に驅られて三秋一日の如くに進む者少なく、勉强は試驗點の爲めにし、試驗點は卒業免狀の爲めに貪らんとし、免狀は名の爲め利の爲めならんとす、而して實力を養ふて學び究めんとする者少なし、此に於てか小成に安んずるの徒紛々として氣慨を滅して食祿の犬馬と成る、學者賤商氣風と成りて又學者出づべき理あし、余は博士號を以て尊からずとする者に非ず、然れども區々たる人爵に安んじて終に天爵を得るの望みなくんば、

一一

其人の人爵號は煙の如く風の如し、エルベシユスの冷語の如く學問を修め事理を究むるは、私愛に出でゝ肉躰の快樂を主とする者なりとせば、學者は實に利己非情の動物なり、學者の不身持ち此に於てか生ず、君既に爰に見る所早し、彼の醫學部書生が屢々醜聞を漏したる最中に立て、一日余に誓ふて曰えらく「斷然君に誓はんとす、志業成らざれば斃れて後止まん、粉骨勉勵必ず邪道に陷るまじ」と、斯て君は品行最も方正なり、妓に媚れず酒に親まず、思ふに今日も亦依然として斯くあるなるべし。要するに君は非凡の學者なり、君が博きを欲せず唯一點に深く貫くの氣風あるの故を以て、若し君を針の如き眼の人なりと評せば、當時余と君と席順の優劣を爭ふたる中に立ちて、最も奇想兒たりし醫術の名聲家山縣正雄學士は快刀の如き腦の人なり、而して當時詼謔兒たる關塲不二彥學士は槌の如き拳の人にして、當時の灣泊兒たる參事官津田喜代太郎君は髮剃の如き舌の人なり、幸田露伴君亦當時の粗放兒にして骨の人と言ふを得べきか、獨り野間光彥君は潛伏の隱士にして胃の如き人と言ふべし。嗚呼過去運動塲裏戯兒の光景は、博士號に刺戟せられて同伴法の感淺から

ず、ウェルリントン將軍がエトン運動場に、ウァートルローの勝見よと叫びたるさへ思ひ出されぬ。

猪子君、君は有形のパチルス學者なり、余は無形のパチルス學者なり、君は日々に物躰上に觀察すれども、余は日々に人心上に觀察して腐蝕せしむるの夥しきを見る、人士の良心も社會の良心も悉く腐蝕せられたる不幸を視る、古人は書を讀みて苦痛多しと嘆ぜり、余は善の實美、道の使命を知りて痛激に堪えざるもの多きを覺えぬ、君之れを讀め、我れ君の爲めに讀まん、是れ東坡詩仙が一律なり、

入山に住むと言ふも水にも亦住む、下に万古蛟龍の淵あり、道人天眼王氣を識る、菴を結んで宴坐す荒山の巓、精神山を貫きて石爲めに裂く、天女下り試む顏遵の如し。

小說

乙女

は、あ、

彼は如何にしたりけん今日も早暮れたるに。いざ今宵は自ら行きて我が可愛き人を問はん。

人も知らぬ浮世の偶には斯る悲しげに心細き事は何許にもあるにや。かくなげきつゝ我はハンチングを冠り杖を持ちて出でぬ。暫しありて人の往來はしげき狹き通りに出でたり。このあたりは多く力業する貧しき者共のみ住めり。道行く人は白き兵子帶しめて紺足袋はきたる我を見かへるもあり。我が何處に行き如何なる人に遇はんとするや誰あつて知らん。

我は細く暗き路次に入らんとす。右には薪屋左に八百屋ありて其が軒の下なる青き野菜の中に立てたる石油の燈火は何時もの如く長き油煙を吐けり。

乙女が母は首を垂れて巾狹き赤き帶を縫へり。膝のあたりには半ば出來上りたる仕立物あり。紺色の切れの間に黑繻子の襟白き木綿の端水色の紐の如きもの雜り重れり。前なる臺の上に薄暗きラムプはいぶせき六疊の間をおぼろげに照らす。更紗の夜着着て睡むれる乙女が紅を含む左の頰は照らされたり。前髮厚く額の上に垂れこの日頃病みて梳らぬ細き髮の毛ほつれ落ちて首のあたりにかゝれり。押入れの唐紙の腰は黑くよごれて雲母の紋も消へたる所へ白き半紙を三處四處に張り付けたり。しきり障子の破れ目を射扱ける光は勝手の間の

黑き疊の上に所々に碎けたり。向ひの家の入口に點したる燈は戸の立て合ひを漏りて母が後なる障子に眞直なる縱線を引けり。長屋の人々の通りに出で又歸り來れる足音しば／＼聞ゆ。

「我はかく思へり行々歌子を學びの道に委ぬるとし玉へ。なべての世の乙女の如くけがらはしき戀の歌唱ひて糸彈くことなどはよし玉へ。彼の生ひ立ちは誠に人に過れたり。必ずや言の花をもて葉をもて飾り／＼たるいみじき女王を造るらん。イギリスも日に／＼進みて讀本の三の卷も最早終らんとす。行々も己れに及ぶ限りの力を盡さしめよ。」かく云へばいと恥かしき心地すれど。母は云ふ「君ならで誰をか賴まん。願くは父なき彼を導きてよ。げに商人の身の墓なきは今日は昨日とかはりてかゝる哀れなる有樣とならんとは。それのみならで近きみよりの者迚もなければよりすがらんすべもなし。己が齡は四十路に近けれど彼は今年早十三心細さも日增し忘れんとす。五年六年月日の過るはげに夢の間之今日のかゝるいぶせき住居を後の日の話し種にも。初より相知らぬ人に圖らずも今日賴もしき力を得ることどかな」「遙か旅の空より出で來て兩親もなく貧しき我を憐み玉し君がなさけを如何で忘れん。世は定めなく絹の窗掛の間にありし人今は斯る樣となり玉ひ我は又足らぬ事もなき樣になりたり。これ皆君が賜ものなれば其恩を少しなりとも報ゆるの時なれど我力は及ばず」。「否／＼唯歌子の事を只管に願ふのみ。是に越ゆることはあらじ。」

我れ乙女をゆすり起せば彼は目を開きて我をながめぬ。我れ君がこの頃見へ玉ねば今宵尋ねに來れるに病ありと聞く。君が頰の紅なるを見れば頭痛く耳鳴り響くならんと思はる。我が方に來るゝ樣速かに愈へ玉へよ。僅か二三日が中に窗の前なる櫻は悉く散り果て綠葉生ひ茂りて部屋の中暗きほどになりぬ」。彼は答へて「我が病は早や愈へたれば明日は必ず行きて讀本の三の卷を終へん」。「見玉へ歌子我れ今宵君に贈り物をもたらし來れり。かゝる簪と黃金の指環とを見玉へ。又讀本の四の卷をも購ひて來りし」。

彼れ手を出したれば其細き中指に之をはめたるに目を止めてながめ居たり。「君が心にかなふとあらば是より嬉しきはなし。」彼は物をも言はずして猶之をながめ居たるが又我を見て「我が病は早や愈えたり。殘りなく愈へぬ。明日は必ず行かん」

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

「さらば必ず待ち居らん。今宵は夜も深けたれば我は家にかへらん」。

彼れは頭を振りて云ふ「斯くなやみ居る歌子を置きて君は歸らんとや」。母は諫めて「否、歌子、明日は起き出でゝ髮を美しく結ひこの花簪さして學校に行き歸りて直ちに君が許に行く事とせん」。彼は眉を皺め頭を振りて否みけり。「……さらば我れ今宵は歸り去らで意地らしき我が君の爲めに一夜の御伽をせん」。

往來を行く人の話し聲、足音車の音も次第に靜かになりぬ。何處にてか聞へつゝありしミシンの音も打ち止みたり。隣り長屋に住める者も寢ねたるならん音もなくなりてこの花の莟の如き乙女は我が胸に因りて靜かに睡りければ我は竊かに母に暇を告げて歸りぬ

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

わが机の上には三十冊の帳簿あり今日より一一之を調べて拔き書きすべき所みなこれを寫して六月の半ばまでに其仕事を終らざるべからず。

人々は皆歸りぬ。わが傍にて寫しものする老ひたる人も今日は歸り去りたり。彼は曰ふ我はクリストに救はれて世の憂さを知らずと。年老ひたる彼にはげに樂しくもあるべし。我れ後の世の事を願ふは髯白き翁となりて後の事とすべし。恐くは我が鋭き望みの刄を鈍くするとあらん。

ストーブの中に石炭は白くなり。夕日は電燈局の屋根にありて窻の井形の骨は前なるペンキ塗りの壁に斜めに映れり。

今年の春も早過ぎ去りて我が一生の五分の二も夢の間に滿てんとするに我が望みの遂ぐるは何時にやあらん人は我を笑はんとす。

今は日も沈みて部屋の中淡暗き程になりたれば此寂しき處を立ち出でんとす。されど此部屋は我が家に歸りて養ひの父母の許にある心使ひよりは却て勝れり。帳簿は盡く長持の中に納め硯箱の蓋被ひて壁に持たせたる杖をとりて出で部屋の戸を閉づれば其響遠く聞ゆ。庭に臨める長き廊下を通りて石段を降るに邊りに人も見へず。遲櫻の花瓣は散りて昨日降りたる雨だれの中に浮けり。土藏の葺き下ろしたる屋根の下たゝきの上を通れば靴の聲高く聞ゆ。土藏の口には何も見違ふ計り同じ様なる鐵の戸を閉ぢて大なる鍵を下ろしたり。亞鉛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

屋根の通り道をつき當りたるところの部屋の中は暗きに紺の法被を着たる年寄り親爺銅のカンテラを拭ひ居れり

我は裏門をぬけて通りに出でぬ。

兩替町より左に坂を登らんとす。少しく隔りたる所は我が近き眼には皆黒く見ゆ夕日僅かに殘れる所へ鋭く尖れる屋根幾つ見へて信濃屋の鬼瓦の上に一羽の烏鳴けり。彼は今宵如何なる人の魂を誘はんとするや。半ば戸を閉ぢたる車屋が住へる小さき家草鞋つるしたる荒物屋鹽煎餅屋など障子に映る燈火明し。老ひたる檜の樹生ひ茂りたる明神の祠の木の下暗に唯一つ輝く石燈籠燈火麥の穗に似たり。玉垣朽ち摧けて大なる石の上に後ろむきにたゝずむ童子あり。短き着物着て日にやけたる臑をあらはし足に餘る下駄を穿けり。五分刈の髮は長く延びて首筋を隱しぬ。夕ざれの空氣は彼の顏に觸れて涼しくもあるか。

左に曲て人通りしげき往來に出でゝ暗く狹き路次に入らんとすれば老ひたる婆々いそがしげに走り出でゝ八百屋が油火に照らされたる我が顏を見たるが又直ちに足早く驅け去れり。

家に入りて障子あくれば母は臺所の火鉢の傍にて茶碗に湯を注ぎつゝ居たり。彼は涙ぐみて「今君を呼びに遣りぬ。如何にせん歌子の病は昨日の朝よりにはかに烈しくなりぬ」

乙女が枕元に行きて見れば彼が呼吸は苦しげになりて最早物も言はれず。我をば我と見るや否やそれさへ僅かに一時二時の間となりぬ。醫來りて藥を與ふれ共甲斐なく此花の蕾の如き乙女は最後に我が腕に横さまに抱かれ母の手より與ふる水を飲みて死にけり。我等唯涙にくるゝのみ。

目を閉ぢたる乙女を仰ぎたるまゝ靜かに枕に倚らせたるに――今宵に限りて此間に點じたる――蠟燭の燄靜かに震へて彼が胸をさへたる右の手の中指にはめたる金鍍の指環を輝かす。

五月廿一日日暮るゝ頃明神の森の下を通りて歸らぬ彼が旅立を送る者は母と我と澤町の乳母とにてなき父の傍に埋めんとす。

この後我は欲深き望を遂げ富み榮へても如何にせん。再び遇ふとのありと云ふ賴もしきクリストの歌を聞きに行かん。

文藝

隨園詩話の數節

無名氏譯

古人は詩を作り今人は詩を描すとは高菁邱の笑語にあらずや詩を描すものは生花のたぐひに似て優孟衣冠の世のことわざに漏れず、これぞ詩中の鄉愿といふべきなり、たとへば少陵を學ぶもの丶如し、そのいふところ誠に少陵に似たり。又昌黎を學ぶもの丶如し、その吐くところ頗る昌黎に似たり。されど眞杜眞韓の詩を觀すして、僞杜僞韓の詩を觀るはいかにぞや。孔子は周公を學べども王莽の似たるが如きにあらず。孟子は孔子を學べども王通の似たるが如きにあらざりし。唐の義山、香山、牧之、昌黎ひとしく少陵を學ぶ、しかるに其詩集みな別に一旗を樹てたり。古人はその神を傳へてその描を嫌ふとは、この境をいふなるにや。

才の大なるものは萬里の黃河のごとく泥沙と倶に下るといへり。余おもへらく、しからす。これ麤才にして大才にあらざるなり。夫れ大才は海水の天に接し。波濤の日に浴するがごとし。見るところは皆金銀宮闕奇花異草のたぐひをつくす。いづくんぞ泥沙の人の眼を汚すごときものあらむや。

熊掌と豹胎とは天下の珍味なり。さはあれど生のまゝにて之を呑まむには、一蔬一筍に如かざるや遠し。牡丹と芍藥とは花の富麗なるものなり。さはあれど之を剪綵したらむには、野蓼山葵に如かざるや明けし。味は鮮しきをよしとし、趣は眞なるをよしとす。この境を知りたる後、ともに詩を論ずべきか。

凡そ事一として弊あらざるはなし。詩を學ぶもの亦しかり。見よ漢魏文選を學ぶものは其弊つねに辭の假なるに落ち、李杜韓蘇を學ぶものは其弊つねに心の粗きに流る。王孟韋柳を學ぶものは弱きに倒れ、元白放翁を學ぶものは淺きに失ひ、溫李冬郎を學ぶものは纖みにいたる。よく古人の精華を吸てその糟粕を吐くときは、こゝに惡弊と雖もおのづから盡くるものなり。大方いまの世の詩を學ぶものを見るにおろかなるもの多し。杜韓は學力をもて勝るが故に之を學ぶは鵠を刻むに似たり。刻むで成らざるも猶鶩の類あり。大白東坡は天分をもて勝る。これを學ぶは虎を畫くが如し、畫いて成らざれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ば反て狗に類すとやいはむ。

人を見て辨へざるべからざるものは柔みと弱みとにあり、剛みと暴きとにあり、儉かなると嗇きとにあり、厚きと昏きとにあり、明かなると刻なるとにあり、自重あると自大なるとにあり、はた自謙なると自賤なるとにあり。これ相似たるが如くなれども實はしからず。詩を作るもの亦しかり、その辨へざるべからざるは淡きものと枯たるとにあり、新しみと纎みとにあり、樸なると拙きとにあり、健なると粗きとにあり、花やかなると浮きたるとにあり、厚重なると笨滯なるとにあり、はた縱横なると亂雜なるとにあり。これ亦相似たるが如くなれど毫釐の差これを千里に失ふのためし少なからず。

詩を作ること少なければ思ひ澁り、作ること多ければ手滑かなり。澁れたるを癒さむには多く古人の詩を看るべし、滑なるを醫せむには劍進幾層の法を用ゆべし。

今の人詩を論ずるに、動もすれば厚きを貴て薄きを賤むの言葉をなす。耳食の言かな。厚きものも薄きものも主となすはその妙なるにあり。兩の物をもてこれをいへば、狐の貉は厚きを貴び、鮫の鮹は薄きを貴ぶ。一物をもていふも、刄の背は厚きをよしとし、その刀鋒は薄きをよしとす。厚きものゝ何ぞ必ずしも貴むべけむ、薄きものゝ何ぞ必ずしも賤むべけむ。古人の詩にて少陵は厚きに似、太白は薄きに似たり。義山は厚き方にして飛卿は薄き方なるべし、ともにこれ萬世の名家といふべきにあらずや。これを人の交りに譬へんか、深人の交り難きは淺人の交り難きにいづれぞ。

詩は朴なるべし、巧なるべからず、しかれども大巧の朴なるに非ずんばよろしからず。詩は澹かるべし、濃きに過ぐべからず。しかれども濃後の澹きに非ずんばよろしからず。譬へば大貴人のごとし。官就げ、功成り、こゝに髪を散じ簪を解て、名士の風流おのづからそのうちにあり。少年紈袴のともがら遽にこれを學はゞ笞責の苦みを受くべきのみ。

詩に幹ありて華なきものあり、これ風雅の枯木なり。肉ありて骨なきものあり、これ風雅の夏蟲なり。人ありて我なきものあり、これ風雅の傀儡なり。聲ありて韻なきものあり、これ風雅の瓦缶なり。直ありて曲なきものあり、これ風雅の漏卮なり。命ありて趣なきものあり、これ風雅の土生なり。

題なくして出で來るの詩は天籟なり。題ありて出で來るもの

は人籟なり。天籟は工なり易く、人籟は工なり難し。三百篇古詩十九首みな無題の作なるに、後の世の人その詩のうちなる首面の一二字をとりて題と爲せしが、遂に千古の絶調を擧げたり。漢魏よりこのかた題ありて詩あり、その性情漸く風雅のしたゝりとなる。唐人にいたりて五言八韻といふものをこゝろみ格律の限りを立てゝ、こゝに性情いよ／＼遠かり、詩を以て詩を爲ること今更人のあやしみを引かず、これ水を以て水を洗ふのたぐひ、何の意味かその風雅のうちにあらはれむや、何の妙趣かその詞藻のうちに浮ばんや。

凡そ詩を改むること詩を作るよりも難きは何ぞや。詩を作るは興會のいたるところ手になれて篇を成す。かの詩を改むるは興會すでに過ぐるの後にして大局のおもひ定まり、何となく一二字の心に安からざるものありて、千力萬氣を盡し後漸くこれを求むるによればなり。劉彦和の萬篇に富み一字に窘むといひけむは、まことに甘苦の言といふべきかな。

唐人の句に「南宮歌管北宮愁」とあり。けだし賦の體なり。これをかの方子雲が晩坐の辭に、「西下夕陽東上月。一般花影有寒温」と比べたらむにはいかゞ。知らずやこれはかれの比興の體をもて妙地に出づること更に一歩なるに如かず。

莆田の呉荔娘といふものは庖人の女なりといふ。性潔僻ありて詩を能くし豹章の妻となりぬ。そのゝち二歳を經て荔娘物故りけるが、豹章かれが形見にと遺しをける蘭坡剩稿といふものを寫せしうちに、春日偶成の吟とて、「々曉日映窻疏。茬苒韶光一枕餘。深巷賣花新雨後。開門插柳嫩寒初。鶯兒有語遷喬木。燕子新情覓舊廬。那用踏青郊外去。芊芊草色上階除。」とあり、また「深院不知春色早、忽驚墻外賣花聲」とありしぞあはれなる。

かの昌黎の倔强なる、よろしく俳體を鄙むべきの人なり。しかるに滕王閣の序にいはく、「王王の末に附くを得ば榮燿あり」と。杜少陵の博大なる初唐を薄しとすべきなり。その詩を見れば反て「王揚盧駱當時體。不廢江河萬古流。」といへり。黄山谷の奥峭なる西崑を卻くべきなり。しかれども「元之如砥柱。大年若霜鶚。王揚立本朝。與世爲郛郭」と吟ぜしにあらずや。今の人韓柳の門戸を窺ふとをせず、先づ六朝を掃はんとし、李杜の皮毛を得ずして、すでに温李を輕んずると、蜉蝣のそしりを免かれざるためし、口惜きのかぎりならずや。

批評

脱蝉子に與へて其「星夜」を評す

「星夜」の主人公となりし男

「星夜」面白ろく拜見仕候彼の事ありてよりはや小半年前契の歡愁悲喜も既に忘れ居候ひしに思ひもかけず御作によりて復一種の感情を味ひ且つかけても思はぬ小説中の主人公と相成終り芽出度からぬ艶名を流し候半如何なる歳のまはりあはせかと一笑仕候

御文章は寔に暢達にして、意の到る所筆亦之に從ひ候御手際只管感佩の外無之候厚生館の音樂會にて小弟が始めて彼女を見、彼女は音樂者なりとし玉ふと往時を憶ひ起して賢契の覆案の妙に敬服仕候松の三日の歌留多會にて戀ひ初めたりとの事思はず失笑いたし彼の友人の某に讀ませ度存じ候併しこれは文の結搆上姿勢を取る所より小弟に寃を崇らせ玉ひしなるべくいつもながら文士の狡猾手段と御仲間同志の事故御恕るし可申上候

一篇の結搆上媒酌者なる新聞記者が最初の口をきゝしのみにて雲がくれいたし破談の書狀直接に彼女の母なる人より來れりとなされ候事おかしく存じ候こゝは矢張母なる人が（父を前に出したれば此度は母を使ふがよろしかるべし）記者殿を通じて小弟迄「彼の如き者を差上げては……」の意を達せしめたるやう御書き被遊しなれば記者殿も前に照應し母なる人が直接に書狀を送くるといふ事實ある間敷事もなくあり申候べし如何御文章上の事は暫らく措き主人公として少々憾みを申上度個條有之候即ち小弟の愛を御寫し被下候事甚だ卑しく失望を御描き遊ばさるゝ處いと深き事に御坐候甘たれたる文を届けて郊遊に連れ出したる多辯になりたるなど眞僞打まじりたる小説なれば咎むる程の事にも無之るべけれど去りとては主人公となりし小弟甚遺憾に存じ候また躑躅園にて彼女が小弟の肩に憑りて小弟の志望を喜び聽きたりとなされ候は小弟を以てそんななんぞに墮れらるゝやうの人物と見て下され候ひしか平生知己のやうにてもなしと御憾み申候

兎に角賢契の御寫し被下れし小弟の愛は世間普通ヲハレヲの愛にして堂々たる士君子の愛にては無之少くとも小弟の愛にては無之候

寫眞をながめて夜一夜明かしたると山吹の花片を細斷したると小弟成程一時彼等の無禮を怒り失望も致したれどかやうなる女々しき失望は致し候はざりき知り候はぬ人々には主人公は誰やら分らねば愛も失望も何と御書きなされ候ても苦るしからず候へども知友多き小弟故小弟の關係を知つて此御作を讀まれ候ては計らぬ寃名を受ねばならず候故愚痴をこぼし申候結末の一句畫龍點睛此一句先づ御胸中に出來てのち此御文章御結構に相成りし事と愚察仕候いづれ拜眉の上萬縷可申述候
妄評多罪

脫蟬子の答へ

文を草する苟くも眞情より出でたるにあらざればかねて御叱りの如く俗心俗腸の文士になりはてむ。生が「星夜」一篇端なくも其附記によりて、知友を弄して小說の主人公となして戲れたるもの丶如くに御疑ひを蒙りぬ。生が知己を辱うする畏友に對して斯る不敬を加ふる男と御覽ありしは生の方にも憾みあり。彼の附記なるものは適ま小生を動かして「星夜」一篇」を草せしむるに至りたる因緣を言ひたるものにして友人の事を記するの意味も友人の平生を現はすの意味も之なかりしなり、倘し强いて生が「星夜」を草したる時の腹の中を割つて見たしと仰せあらば、まこと頃日は知友の中に破契といふ不吉事多くして忌々しきことの流行するを悲しき事に思ひて、深きまことの情をもて男に思はれながら輕々しき心もて男を疎んずる女子の薄情に激するところありて聊か其人々の猛省を請はんとの野思を抱きて筆を把りし義に有之候。故に全篇の主要とするところは男に情ある事を示し其情に對して女は深く酬ひざるべからざる旨を寓するにあり。左ればこそ御批評にもありし如く女の母なる人より直ちに破約の書を男に送らしめて以て、破約をいふ事の原因は多く女の母より起るものなることを暗に示したる譯に御座候。女子が薄情なりや否やは自から別問題に屬すれば此に辨ずるも益なし唯だ今日の女流に虛名虛榮を慕ふこと多くして男子の心膽に戀することの少なきは事實にて生を激せしめたる一原因となり居り候。從一位の殿樣ならばいかなる腐腸男子にても戀婿にせんと、願ふは當今の人情にて淺間敷かぎりと存んじ、いでこの薄弱なる婦人原に男子の戀はいかなるものな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るかを敎へ呉れんとの大望も此小篇の中に籠り居り候。戀愛の卑しげに描されて主人公にせられし己れまで卑しきものになりたりとの御叱りは左ることながら戀愛を執着なるものと認むるは小生一家の主義にて山吹を細斷することも、婦人に媢らるゝ事も小生は信じて戀愛の實質と考へ申候、生が星夜の主人公をして己れの爲さんとする事實の順序を其愛人に語らしめたるも世間普通の情思に照さば決して卑下なるものとのみ言ふべからずと確信致し候すべて戀愛を世間普通の理に應じて描きたるは生が堂々たる士君子を寫さんとの野心なきを辨ずるに足るべしと存じ候。知交を辱ふしてより幾載小生いかに鈍なりとも賢兄の品性を知らざるものと思はれしは殘念に候賢兄の事ありし時に人の賢兄に向つて失望は一層賢兄を大にすべしと言ひし時賢兄は怒つて婦人の故を以て品性を大にするものと見做すやと言ひ玉ひし御樣子今に我眼前にあり、生も亦た世の硬骨男兒が往々にして戀愛の事に冷淡なるを知る、何すれぞ賢兄をうつして戀愛と失望と星夜の主人公の如くにする愚をなさむ。又た賢兄の如き人物は小說家の禁物とするところにて、もしまこと賢兄を主人公に取る心なれば生は一部のロマンスを作りしかた宜かりしならむ。然れども戯れにも知友を以て主人公に取りしと思ひたまふは寃罪に有之候。「春駒」の飜案成らざりしが故に星夜を得たるは事實ながら春駒の趣意をもて星夜にうつしたりとはゆめ思ひ玉ひぞ。篇中の戀愛も失望も我想中の愛兒にてどこまでも手離す事は出來申さず、小說は世間普通の實象を描くを本旨とすれば星夜の主人公不出來なりと雖も小生の愛兒に有之候但し理想的に一個の硬骨男兒を寫し出せよとあらば小生は或は其模型を賢兄に偸むやも圖られず候、世の眼もし賢兄の憂ひ玉ふ如く星夜一篇に由て賢兄を見誤らん事あらば小生の罪のほどを恐れて作意を陳ずること斯の如し餘は拜眉の上にて萬縷申上可候

透谷子拜具

某殿

又脫蟬子へ

「星夜」の主人公ならざりし男

御作意拜聽此上かごとがましく申すも餘りほめたとにも無之故何も不申上候

陸奥にありといふなる名取川
なき名取りてはくるしかりけり

○撰擧實錄

民友社の發兌なり、近頃ろ寄送せしを讀むに、撰擧干渉の事實を確かむるに屈强の書なり、帝國議會に於ては、既に堂々此明證を決議したり、全國輿論は明らかに認ためたり、當路の人果して如何んせんとする。志士、此小冊子を袖にし、內閣の左右を察して大ひに決する所あらば、此書の靈は感謝するなるべし。

○愛蘭慘狀、經世偉畧

對馬健之助君の編著なり。著者か理想一百七十二頁に全透す、其志區々愛蘭の慘狀を記述するにあらずして、別に期する所あるが如し。其自序、客の語に藉りて曰く、これ悉く當代の我國を慨せる不平文字宜しく秦火に附すべしと。著者は蓋しパーチルに私淑す、其の風彩心膽を記す毎に文字の俄に勃々たるは之が爲めなり。巴氏初めて撰擧を爭ふて失敗する時、文字、鳳雛の叫ぶが如し。其妨碍政畧を記するに至りて痛快に堪へず。一千八百八十一年、自治黨員三十八名一團となりて退場を命ぜらるゝの記事、チロン鎭壓令の爲に波氏亦捕縛せらるゝ時の記事の如き、光焰万丈、字々躍立、思ふに、日本國會開設前の志士にして靈目此の文字を讀むあらは、首肯すべし。杜牧之の句を以て結で曰く、滅六國者六國也非秦也族秦者秦也非天下也と。著者の所思察すべし。

○哲學會雜誌

近ごろより改頁したり。其第六十五號、村上專精氏の東洋古代哲學競起の概况、並に、南條文雄氏が解題せる金七十論の辨の如き、普通學者を益すると多し。此分にて押しゆき、哲學思想の更に普ねく行はれんには喜ばしからん。

○國民之友

第百五十九號より表紙の畫一變せり、吉田松陰の傳第五に至り、正に「松下村塾」を記す、蓋し尤とも得意の所ろ、たゞ筆の餘りに達して情の少しく鬱勃ならざるを遺憾とす。

○史　海

益々健かなるを祝す。其第十三卷に至りて、篁村氏が、文化文政度の小說家と題する一文見ゆ、もとより性狀を文學的に解剖綜合せるとを要む可らざれど、亦讀みて價ひあり。上古王師征討の跡の地圖は異論の種子とあるべき點多しと見ゆ。

○城南評論

新らしく生れ出づる雜誌は當分の內面白きものなり。城南評論は第四號に至りて、いよ〳〵面白し、今后更にます〳〵妙ならんことを祈る。野口寧齋が趙甌北第三人を自負する辨の如き、尤とも面白かりき。

○大日本敎育會雜誌

一年間の收入一万七千餘圓にして、差引六千二百餘圓を遺し半官會の常として景勢仲々に隆々たる大日本敎育會は、其號外たる近ごろの報告の中に、去一年間の景況を集錄せり。

○經國

第九號に至りて、沼田正宣氏が帶刀の自由を許すべしの文見ゆ、一奇論なれども、既に他の新聞紙にも見えたれば措く。二十二頁に渡る長論文「朝鮮」の一篇は、朝鮮は從來我が朝貢國なりを以て初む。

○敎悔叢書

其第五輯を見るに、北海道同情會より、原胤昭氏等の盡力にて發行せらるゝものと見え、罪囚敎悔の心切現はれ、目下人の注意せざる一大事業に任ずるの精神確固たり。深く之を祝す。

時事

○後藤伯爵の邸後

府下白金猿町六十一番地に正直なる車夫あり、或人との連帶借金に苦しめられ、十圓を返濟せん爲に十五年間勤勉し、合計六十圓の高利を拂ひたり。去月來病に罹り臥す、妻も亦た病む、三子少幼にして食料を得可らず、一族皆な餓て死せんとす。隣家に慈善者某あり、日々米を送り辛ふじて死せしめざることを得たり。某、また近傍の醫師加治木某に委賴し、診察を請へるに、彼れ容易すく來らず、遲々緩々書生を送りて代診せしめたり。斯くして餓を凌げど病を防ぐに足らず、車夫終に死せり。其借家の主人は細川潤二郎氏なりと云ふ。其代人來り家賃を要むること酷なり、遂に疊と障子とを取り去る。斯くして七月四日に至る。大同團結の主唱者にして俄然內閣に飛入り、今や遞臣大臣たる後藤象二郎氏が邸に、
陛下行幸せらる。午すぐる二時、車馬轟ろき、砂塵揚る。後藤邸內君が代の奏樂朗々たり。同じき三時、彼れの妻肉汁を啣し苦喚して亦た死せり。三子皆な孤となる。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○礦毒事件

俠客議員田中正造氏をして、議場に痛憤慷歎せしめたる足尾銅山礦毒の事件は、其后いよ〳〵民心を切迫せしめ、被害人一百餘名、去二十五日上京して請願の手續を爲す。義俠同情の念ある人、須からく之が爲に計るべし。

○從五位平沼專藏

尾立撿事の論告は、冷々たる法術に於て、ヒウマニテーの爲め万丈の氣焔を吐けり。幾多暗涙を灑ぎたる被害者、慷慨、法律の冷酷を憤ふりたる志士共に少しく慰さむる所あらん。

○畫人東西

去一日の夜、油畫堪能の人帝國ホテルに會合し、シカゴ万國博覽會に油畫を出品せざることに議決し、既に少なからぬ準備を爲せしに拘はらず、斷然之を中止したり。而して其事の起元は、博覽會事務局の副總裁たる九鬼隆一氏の依姑の沙汰に激するにありとぞ。九鬼君の美術論は年來久しく聞けり、其の日本畫に僻醉して、油畫の美を悟らざる演說も屢ば聞えたり。然れども、之によりて熱意出品せんとする人々に不公平の取計らひを爲すとは、敢て信ず可らざる怪報にあらずや。されど油畫派の人々が議決も亦據所なくんばあらじ。

○依然たり又超然たらんとす

黑幕會一と先づ片付き、松方總理依然戰を續けて、たゞ大臣の空位に新任者を見んとす。撰擧干涉の決議は既に成立ち居れり、次期議會の一步は極めて容易に踏出すことを得べし。內閣の諸公たるもの、何如なる經綸を立てゝ之に應ぜんとする乎。

○プールス問題

多年の疑問たるプールスは、又亦延期することゝあらん。一夜にて種を作り、十年之が爲めに喧嘩を爲し、最后は方の付かざる爲めに亦數年を過ごす。年月こそ惜しけれ。

○弄花事件

其終末如何ん、何れにせよ掛念に堪へず、たゞ一丹暴露したる以上は、之を曖昧に附し去る可らず、速かに黑白を斷じ、明らかに正邪を判ち、而して敗德の人を法官社官より退斥すべし。

●孤女學院　窒扶斯熱流行し、大須賀亮一氏、矢野氏をはじめ、孤女數名病床に臥されしが、此程追々快方に赴かるといふ、吾人は深く喜悅に堪へざるなり。

即ち

一に神を敬ふと

二に人を愛すると

三に自己を重ずると

此三の部に於て基督の如くなるを得ば即はち完人たるなり、而して人は遂に此の完人たるとを得べきものなり。

(六) 要するに教育の目的は完全なる人物の理想に向て人を開發するにあり、而して、完全なる人物とは基督の如く神を敬し、人を愛し、自己を重んずるもの是れなり。

六段　總括

(一) 以上の所説を以て余は第一章を終らんとす抑そも教育とは何ぞやと問はんに古來樣々の解釋あり余は其の十八種を擧げ之を三種に分ちたり即はち教育は完全なる人を造るとを旨とすと云ふものあり一也、教育は人を或る事務に適するものと爲さんとを旨とすと云ふものあり二也、教育は人に智識を與ふるとを旨とすと云ふものあり三也、以上三の類に於て、余はその第一類を採り、教育の目的は完全なる人を養成するにありと斷定したり。

(二) 然れば完全なる人とは何如なる人ぞ其理想時代と國とによりて相違し隨て其教育法亦同じからざるなり。

(三) 若夫れ此等の國風時勢に拘はらず超然として其理想を完うせんとするに人は到底社會の氣風に隨て幾分か其理想を形造るものなり故に完全なる理想に向て發達せんとすと云ふと雖ども其理想は既に社會の大勢に隨て變じたるものなり故に教育は勢ひ社會の情態に伴て化するの外なきが如し。

(四) 左れど人は到底社會の爲に生るゝにあらず社會は即はち人の爲に存するものなり故に人は必ずや社會上に超然たる理想を保ち之に向て發達して以て其の社會をして隨ひ化せしめずんにある可からず。

(五) 此の故に現社會に超卓する理想を立て之を人類の師表及び目的として、人を進化開發せしむるとを要す、而してその、理想となるものは實に基督の外なし、左れば教育とは結局人を基督の如くにするの謂たるなり。

(六) 終に臨み教育學の字義を解せん、教育學は英語に Science of education. 又 Science of Pedagogics. 又 Science of Teaching. 又は單に Pedagogy. と云ふ、ペダゴグの字は初め子供の德育の意義なりしが近頃は概して之を教育と云へる廣き意味に使用するに至れる也。

第二章

教育の快樂

(一) 孟子曰く天下に三つの樂みあり、王たることは與からず、父母兄弟恙なく在ます一の樂みなり、仰で天に愧ず伏て地に耻ぢざる二の樂みなり、天下の英才を集めて之を教育する三の樂みなりと

(二) 英才を集めて教育するは固より樂しみの大なるものと云えども、未だ其最大なるものと云ふべからず、教育に於ても亦た之を最良のものと云ふ可からざるなり、英才を育して英才となすは教育の主旨にあらず、普通凡俗の兒恐らく英才と爲すべきことを信ずるを最大の樂しみとし、如此き教育を以て眞正最高の教育となす、ミス、ピーボディ曰く、母は其兒を愛し、教師は其才を愛すと、才を愛して之を教育するものは完人を養成すると能はざるなり。

(三) 天は惡しき者の上にも義しき者の上にも雨を降らし、日を照らし天地宇宙の大思想を示す、即はち　天が人を此世の學校に置くや義者不義者賢者愚者の區別なく、一樣に之を教化せんとするなり而してその教化の目的必らずや成就し、人は何如なる人と云へども皆な善き人となるとを得べしと信ぜしむ。

(四) 凡そ此信仰なきものは只だ英才をのみ教育するとを樂しみとし万人皆共に教ゆべく皆共に善化すべきとを信ぜざるなり。此故に英才を育するもの、富者の子を教ゆるもの、貴族を教ゆるものはあり、普く人を教育し、貧人、不具者、は言ふ迄もなく、世に痴愚と稱せられ、全く度外に放棄せられたるもの迄をも教育せんとするの樂は万人皆神の殿なるとを信ずるものにあらずは能わず。

(五) 創世記の初に云く、人は神に似せて造らると、新約書基督の末期に云く、吾は世に勝てりと、抑そも人が神に似神に同ずるの靈性を備具すると、及び若し之を發揮すれば神と和ぐとを得、神の子たるとを得るとは、世

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

開けてより此の方尤も高尚なる人々の心の中に常に固く信ぜられたる所の眞理なり人にして心に神靈を宿さざるものはあらず故にその幔幕を開き其靈性を開發啓導せんさして而も其種あらざるものはあらず。

（六）サミウエル、スマイルスが自助論及品行論を讀みたる者は王侯相將に種あるとなく、人の性、皆相近かく、習つて而して相遠ざかるの理昭々さして明かなるとを見ん、今ま古今最も著名なる偉人にして其出所の極めて下賤に而かも立身の極めて高大なりし例證若干を左に擧示さんに

一、グリーキの詩聖ホーマーは小農夫の子
二、同く詩聖バーヂルは門番の子
三、天文學者コボルニカスはポーランドの麵包屋の子
四、同ケプレルはゼルマンの酒屋の子にして嘗て給事したり
五、アイザツク、ニウトンはタランハムの小農の子
六、シエキスピーアは材木商の子
七、ミルトンは金貸の子
八、新世界の發明者コロンバスは綫匠の子
九、電氣發明者たるフランクリンは蠟燭屋の子
十、著名の說教者ホイツトヒールドは旅舍の子
十一、回々教の開祖モハメツトは羊牧人
十二、リビングストンは織屋の子
十三、米國大統領の中リンコルンは鐵道人夫たり。グランドは柔皮匠たり。ガーヒールドは舟曳たり
十四、英國のマコウレイは亞弗利加に旅する一商人の子
十五、豐太閤は尾張の細民の子
十六、漢の高祖は泗上の亭長たり、

此等の偉人は大率れ皆な平凡聞へざる人の子にして別に新らしき種を天外より受享したるにあらず啻だ其の內なる性を開發し其美質を外に啓導したりしかば遂に斯くの如き偉大の人さなりたる也。

（七）然れども此等有名の數多の偉人は其先きに更に多數の無名英雄ありて之が師父さなり以てその美質を遺傳したるものならんさ云ふ人ありこの論實に可なり、然れども遺傳も亦た人の美質を傳ふるに過ぎざるなり、其師父なるもの更に其師父の教化を受て以て開發し、其開發したる所の美質を其子弟に傳へて以て所謂る著名の偉人を造り出せり之を要するに亦是れ人の性の美しく開發したるに淵源せずんばあらざる也。

（八）昔し支那の某は我家宰相を出さんさて門に槐を種新田義貞は我后に將軍たるものあらんさ言へり左れど斯る名家名族の末のみにはあらず病の床に孤劍を揮ひ遂に成すとなくして憤死したる老翁の子又は小暗き行燈の影に糸を紡ぎ謹直なる勞力を以て正義の粟を食みたる老婆の子は生れながら正直忠實の氣風を得たり此子長ずる后ち發達して偉大の人物さなりたるは安んぞその老翁老婆が美質の集積影響したるものにあらずとせん英國の學士ガルトンは遺傳の理を研究し著名の人に必ず秀拔の父母あるとを示せり、然れどもその秀拔なる父母には何如の父母ありしや、思ふに亦た多少非凡の質なかる可らず盖し人の才は漸やくにして成れり喩へば蠻民が漸く開化して文明の民さなるが如し左れば今日に名を著したる偉大超高の人は幾多無名の人の才智思想漸やくにして育積集成したるに淵源するとを思はざる可らず故に遺傳の理法の織そかなるとを知るものは今日の英才は一朝にして成れるにあらざるを悟り又た今日の鈍才は決して之を棄つべきにあらざるを感ずべし今日の鈍才に多少の智德を與ふるは后日の英才の種なり此故に只だ英才を愛するは教育の主旨にあらず、鈍才に望を失ふも亦教育の勘辨にあらず寧ろ英才は之を放任すとも鈍才は篤く之を教育して其の一日も早く英才造出の源由さならしめんとを希圖せざる可らず。

（九）人に必然の廢人なし、若し之を教育せば皆な完全の人さなるとを得べしさ、教育者若し此信仰を欠ば、その安心快樂あらざるなり。基督の十字架上に死するに當てや、主の行き玉ふ所には何處にも行ん汝は生ける神の子なりさ贊歎したる弟子等は皆恐れて散亂し天下の智識を集めたる羅馬の學者判官は日欲に盲して光を見ず觀者四方を環り情けな氷の如くにし冷笑して嘲けり匹夫官人驕然さして撿視し下郎鎗を揮つて之を刺す、夫れ天下の至聖に會して其聖を覺らざるは至惡なり神の子基督を縛し基督を罵り基督を虐殺するに至ては人情の極惡極醜を悉さずさ云ふとなし故に神學者は云く此時惡魔は在ん限りの惡を行ひ人情は汚らわしき限り汚れたりさ人は果して怪獸惡禽さなれるなり、其眞心消へ其愛情亡び、其靈

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

性殆んご失せたるに似たり。若し說の容れられざるによりて絕望し、位の昇らざるによりて世を果敢なみ貧困窮乏によりて人情を疑ふが如き僻踒をして此時に際せしめば、彼等は人を指して何如なるものと云はん哉。左れご基督は言へり、吾世に勝てり神に感謝すと、即はち人の悉く救はるべきとは人の神の如くなるを言ふにあらずや、然らば則ち基督は此の極醜極惡の人を見て尙絕望せず、如此き徒も遂には神の如くなるを得べしと斷言せり、此の斷言は何如に强き信仰を世の教育者に與ふるや、教育者よ學生の化しがたく、卒業生の迷ひ易きを見て輕々しく失望するとなかれ、大聖の人基督を殺すほごの惡をなせるものも尙善に遷るを得るにあらずや基督曰く神よ彼等の罪を許し玉へ彼等は知らざれば也と、之をして知らしむるは即ち教育者の任也。

(十) 人は皆な完全に發達するを得べし、然れども人は元來自由の意思を有し、善惡の何れにも進行するを得るが故に、若し之をして善に發達せしめずば、則はち惡に發達すべし、人は二人の性あり、その能く完全なる善に發達するを得ると共に亦惡に走るの自然性あるなり而して之を善に移し善の方向に發達せしむるは即はち教育者の任なり。ダルヰン曰く人は包圍に隨て化すと、則ち善に化せしむるの包圍を備ふるは教育者の任也。クリスト曰く、神を信ずるものは救はると、即ち神に近かしめ神の包圍に接せしめ以て救はれて完人とならしむるは教育者の任也。

(十一) 教育の目的は人を基督の如くにするにあり、故に教育者は學生の心を神に近づかしめ、万物の智識を徹して神の力神の愛を直覺せしめ、世に處する法則の中に嚴然たる神の則あるを確認せしめ學生を神と和らぎ、神と一躰たらしむるにあり此故に教育者は一種の牧師なり、牧師は一種の教育者なり、其間に經庭あるを見ず、只だ教育者は世の智識を教ゆると多く、牧師は靈の智識を說くと多しと雖も、疑する所ろ遂に同じからずと云ふことなし。余は思へらく今后教育者と牧師との區別は益々不分明となり遂に牧師は教育者中の大先覺が之を兼ぬるに至るべしと。マルテン、ルウテル曰く余若し說教者たらざりしならば必らず教師となりしならん實に余は其何れか優りて好きを知らずと、ベーン曰く說教者は倫理の教師神の眞理の說明者なり、教師は世の智慧の說明者文學及び學術上の說教者なりと。

(十二) ソロモンは神の殿堂を建たり教育者は人の心に神の殿堂の扉を開く、昔し、イスラエル人は、バベルの塔を半ばにして止めたり教育者は人の心を高く天に達せしむ。主曰く、汝等万國に行て福音を宣傳へよと教育者は万人の心に入て茲に福音を成長せしむ。凡そ教育者にして只だ藝術末技のとに跼蹐し、人の心を神に近づき神と和らぎ神に似て神と一躰たるものとならしむるを得ずんば其教育の最大目的最要主旨を達せざるものなり。何んとなれば教育の要旨は人を基督の如くにするにあるがゆへ也。

(十三) 昔し、ルソウ片田舍に敎へざる頑童の碌々として遊戯するを歎じ傍らに富人の家從へて富者の獨り榮華に耽るを慨して、曰く、嗚呼世人何ゆへに此幼兒を教へざる乎と、吾等今の無學兒を見て常に此歎なくんばあらず誰か北海道の荒蕪に期するたのみ憂ひとする幾万の人の心は尙ほ茫として開拓されざるにあらずや。

(十五) 神が其神たる如く人を教へ玉へり、教育者も亦た自ら活摸範とならずんばある可らず、摸範によりて人を教へんとするは、只だ文字によりて人を益せんとするに同じ蓋し行なきの言語は死せるに均しきなり。教育者ペープ、カーペンター夫人曰く、人の子を當然に教育せんと欲するは教育者に取りて第二の要務なり、尙容易なり、第一の事務は先つ自ら教ゆるにあり、之を尤も難しとすと。斯て教育者は道に肉躰を添て人を救ふ、その爲す所ろは基督が十字架上に死せる天職と同じく神が基督を世に下したるの攝理と同じ、教育者の爲す所は基督の爲し玉ひし所ろ、亦神が爲し玉ふ所ろのものなり、教育者は世に立つて神の事を爲し一個の小基督となりて人の靈を救ふものなり生れて此榮ある職を荷ふ快樂何ものか及ばん。

(十四) 鮑叔が管仲を誘ひ出し玄德が孔明を引用したるが如く教育者は人の中の人を誘導啓發し、空しく陛下に蟄居するの善者義人を世に招き出す。教育者あるによりて人の中の善人即ち眞の人は世上に露はれ來れるなり、教育者ありて初て人あり教育者は、第二の造物主なり。

第三章

學科課程　第一段學論

(一) 教育は人を完全に發達せしむるとを旨とすと云へり然らば之を何如にして完

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

全に發達せしむべき乎の問起り此に於て教育の術に樣々の異類を生す而してその類數多ありと云へども要するに之を二種に大別すべし、即ち全く之を放任すべしと云ふもの一也、之に術を施こして人の手にて教育すべしと云ふもの二也、蓋し放任すと云ふは之を棄つると云ふの義にあらず人の不完全なる手の中より放任して之を周密賢善なる自然の手に委ねんと云ふにあり即ち亦一種の教育に托するが如し、ルッソゥは其教育小說エミールに此意見をもて想像上の自然教育を畫き人の手にて關渉せざる時初めて完人物を生ずべしと主張したり。ハーバート、スペンサーは自然教育の論者なり、然れども此かゝる極端の說を排し嘗て論じて曰く一方に自然に任ずべしと言ひて而して他方に人爲の學科課程を要すと云ふは甚だ矛盾するものに似たり然れ是も之れ亦自然に隨ふ所以なり、凡そ生物は其高等となるに隨て其親の保護を要するの期限長く其度切なり故に人の如き万物の靈長に至ては胎內の養ひ、幼時の保護は言ふに及ばず年少き間教師の教導保護を要すること勿論なりと、此スペンサーの論は能く、ルッソゥ等が極端なる放任說を破するに足れり、教育上には到底人爲の保護干涉を要し、隨て相應一定せる學科課程を要するものなり。

(二) 教育上學科課程を要す然らば何如なる學科課程を尤も必要なりとする乎、所云る「エヂウケーション、バリウス」即はち教價の說、スペンサーが教育社會を驚かせたる何如なる智識尤も價値ありやの問題を次に生ず、之に對して古來樣々の說あり。

(三) プラトゥは其共和國中に音樂、躰操、算術、詩歌、地理、天文、論理の諸學科を心の教練に必要なるものとし、その價値を論じたり、又アリストートルは政治學中に同樣の論を爲したるが取分け音樂を以て教育上尤も價値あるものとなしぬ、要するに希臘の哲學者は智識を直ちに實益に活用するの上よりして之を重んぜず人の靈を發育せしめて宇宙間の眞美を認想せしむることを旨としたり一言するに智識は教練の爲に價あり實用の爲に重んずるにあらずと信じたり。

(四) ロード、ベーコンは其學問論（スタデース）中に曰く、歷史は人を賢にし詩は才にし、算數は鋭くし、理學は深くし、倫理は重厚にし、論理及脩辭は論辨に長ぜしむ、蓋し人の才に故障物あるなし若し相應の學科を以て之を教ゑなば皆發達すべし喩へば身躰の病に皆相應の治療法あるが如き歟、背骨及膀胱の病には玉投を好とし肺及び脾の病には射獵を好とし胃病には緩なる運動を好とし腦病には乘馬を好とす。如此く人の才若し浮動して定まらずは之に算數を學ばしめよ若し堅白異同の辨を爲すこと能はずば之に「スクール、メン」を學ばしめよ、若し細かに批評し一事を明鑑し論證し、說明するが如きこと能はずば之に裁判事件を學ばしめよ、大凡心の欠典は之を補ふことを得べき相應の方法皆夫々に存するなりと、蓋し、ベーコンは智識を見て食物となさず、之を藥の如しとせり、即はち智識は人の能力を教練するが爲に必要なりとし之を直に實用するが故を以て重んぜざりき。

(五) ドクトル、ホエールハ其「カムブリッヂ、エヂユケーショシ」中に論じて、學科を固定的（パーマチント）のものと進歩的（プログレッシーブ）のものとの二に分ち古典古語明確に定りたる學理などを固定的とし現代の文學、日々に進歩する學理等を進歩のものとなしぬ而して學生は過去と現在とを二つ乍ら學ばざる可らずと云へども現在及び未來を好く推測らんには先づ過去の事に精しからざるを得ずとの論法によりて少年間の普通教育には固定的の智識を早く且つ多く教へざる可らずと論定したり而して其の「普通教育の一部分としての算數學論」なる有名の小冊子に算數學を普通教育教科中に尤も價値あるもの〻如く論斷したり。

(六) ドクトル、ホエールが算數學重用の小册子に對し、サー、ウイリアム、ハミルトンが著名なる駁論あり此の二大家が相互の論駁は教育社會を大に驚動し爲に「教價」の論に比類なき進歩を促ながしたり、ハルミトンは其「哲學及文學士の論難」と云へる著書中に云へらく、之を要するに算數學を如何に多く學びたりとも之が爲に人世及び哲學が必要する數多の智力を心に備具せしむることを得ざるのみならず寧ろ反てその智力の發達を損ふことあるを見るなり例せば內外に觀察するの力、抽象概括するの力、普通一般の事の判斷等は算數學によりて養成せらるゝことなし寧ろ盲信若しくは不道理なる懷疑の何れかに陷するの患多からんとすと。

(七) ハーバート、スペンサーは其有名なる「何如なる智識尤も價値ありや」の論文中に先づ人世の活務を五大段に分ち夫々に尤も必要なる學科を論じて遂に悉くサイエンスに在りと斷定したり、然ども其の所謂るサイエンスなるもの〻解明白ならず或時は科學を云ふもの〻如く又或時は哲學を云ふもの〻如く或時は文學を除くもの〻如く又或時は文學中に存する理法をも含むもの〻如し之を要するに總ての智識中に存する天然の理法を知ることを指さしてサイエンスと稱せるものに似たり今その論文中にてサイエンスの解釋を與へたりと見ゆるものを拔摘せんとするに恐らくは左の一節ならん。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

毛のはへる香油

一名ふけしらず 美人かつら

イヨー奇妙〳〵コンナ藥罐でサヘ毛がはへるから抜毛や薄毛杯は直に澤山毛がはへるに違ひナイ

小瓶 金十錢
中瓶 金廿錢
大瓶 金卅錢

御遠方より御注文の節は郵便爲換又は郵便切手代用にて宜敷猶水物に付通運便に御て送可申候

此美人かづらは極々清浄なる植物油をうすめたるものに髪をこやし毛をはやす効能藥を加へたるものにして男女常に髪化粧に用ゆれば髪をこやし髪の發育を盛んにし髪の抜け落てはげる事なくしらが赤毛となる事なし又髪のうすきを厚くしほそきを太くしのぼせなどのうれいなくふけやできなりなどを生ずる事なし又産前産後などに髪の抜け始めしときは少しも早く塗用すべし抜け毛を止め毛あしを速くする事妙也又既に抜け落たるあとなつほしできものやけどのあとなどに塗り附ればおのづからいつとなく毛のはへると眞實也

發賣元つやふきん本舗
東京銀坐壹丁目（電話四百七十二番）
佐々木玄兵衛

日本第一等 おしろいいらず化粧用

小瓶十錢
大瓶廿錢

白妙は薄化粧の料としてつやある美しき白色をあらわし白粉をぬり附たるがごとき氣味少しもなし

白妙は化粧下に用ゐて白粉の附き方よくむらにならず又あせをかきてもはげるとなし

白妙を用ゆればいかにあれ性の人にてもあれるとなくにきび○あせも○はたけ○すりむき○ひゞあかぎれ○しもやけなど直ちに治すべし

白妙は人躰のはだをやわらかにしてつやをよくし眞にゑんびなるはだ合となし

白妙は色黒き人もしぜんに白色の美人となるべし

白妙は少しの水にてとかし又は其まゝにて用ゆるもよし

白妙はもちまへの香氣によりてもろ〳〵の不浄を清むべし

白妙は醫藥衛生の諸學理とあまたのためしとにもとづきワセリン○リスリン○ラノリン○白色顔料其他いろ〳〵のよき藥を以て製造したる無比の化粧料なれば從來世間にありふれたる化粧下や水白粉ねり白粉とは大にきゝめあり

白妙は人躰に無害有効なるは勿論化粧下に用ひて日本白粉のをそろ可きどくをふせぎ前記の實効を有する事は近來がいこくの醫士學士等のとつけんせつと又わがたび〳〵のためしとによりてしかとみとむる所なり乞ふおためしの上御ひようばんをたまへ

○元祖色白くなる三能しやぼん 一個 十錢
○髪のこやし毛のはへる香油一名美人かつら 大瓶 卅錢 中瓶 廿錢 小瓶 十錢
○あれ性の御方は御必用玉子ぬか 一個 一錢五厘
○御おしろい下日にやはぬ水玉のはだ 一瓶 六錢

發賣本舗 銀座一丁目つやぶきん
佐々木玄兵衛 電話四百七十二番

便利地方大販賣所左に
大坂四ッ橋本林丁子堂 ― 函館末廣町新田太平
神戸元町精々藥館 ― 長崎本下町永福號

毎土曜日發兌

東京經濟雜誌

第六百卅一號

目録　七月九日發兌

社說◉中立黨の必要◉日本の政界◉銀問題の近況◉鐵道公債の爲めに我が邦の經濟上に發すべき結果如何◉日本古來の憲法如何

寄書◉東京專門學校經濟科試驗問題答案◉中央商業會議所の開設を政府及ひ全國商業會議所會員に勸告す（飯田旗郎）◉對外商策一斑（高木徹三）**墨西哥事情**（片山平三郎）

雜報（數件）◉銀行及商業之景況（數件）◉官令數件

◉定價一册金七錢（市外郵稅五厘增）

東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

兄姉が高潔清淨なる生活を取り正當なる業務を營むの一助として各自の便宜を成す一書を編制せんとす、同意の敎會學校敎社及び基督敎主義慈善傳愛の諸結社は其地位名稱主義綱目また個人は住所職業姓名を詳細に記載し來る八月三十一日限り小生迄御通知被下度候也、御通知の節は左の如く願上候

第一號表

府縣市郡區町村番地

宗派別又は附屬宗派

別主義云々　敎會名社名又は校名

第二號表

府縣市郡區町村番地

職業　姓　名

（注意官吏敎員役員等は職業欄内に其官省學校社名の記入を望む）

日本全國の諸敎會は公會に於て報告通知を望む

横濱市不老町美以美敎會內

天田儀八

正札引なし

新形流行

○はをり紐　品々

○帯留類　品々

○時計紐　品々

○メリヤス　品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ヲ精製仕○御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舗

日本橋區よし町

佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

毎月一日 **後進** 定時刊行

第六號

七月一日發刊一部前金六錢十部五十五錢郵劵代用一割（五厘切手に限る）

海事思想……

青年社會の弊……陸 實

清教黨の説……長井 行

讀書誤人論……齋藤栗堂

儒學の復活……小林又次

俠骨傳……好劍子

山鹿素行……同心閣主人

孝子萬吉……古劍生

菜招譚抄……澤雷生

慷慨悲憤の落書……

經世策序……尾崎學堂

經世偉畧跋……櫻庭乾外

海棠をみてよめる歌……

其他評林雜報數十件……

第七號ヨリ紙面改良定價ヲ五錢トス

發行所 東京市小石川同心町廿七番 **國士館**

來ル九月當校附屬**高等女學校小學校**生徒ヲ募集ス詳細ハ當校ニ就キ承合スベシ

明治廿五年七月

女子高等師範學校

毎月二回（黨報）十日廿五日

黨報

（七月七日發行）

○黨論

◉政黨は實業家の保護者なり……栗原亮

○論説

◉政務の調査は大經綸を畫するの秘訣なり……駒林廣運

◉國民協會……江口三省

○黨報

◉總會及正副部長會◉次點者百十餘名◉錦輝館に於ける大演説會◉熊谷町に於ける總理の一行◉除名へ賀問及答辨◉再質問及再答辨◉第三質問回答を與へす◉除名脫黨代議士議場運動の成績◉機關雜誌發行の計畫

○演説

◉敢て內閣諸公に問ふ……河野廣中

○帝國議會

◉貴族院

○外報

◉米國政況報◉英國政況

○時事

◉黒幕會議◉井上伯◉奇觀◉西鄉品川兩樞密顧問◉伊藤一伯一子◉大臣◉法典延期案◉官吏登用試驗◉伯と山縣伯◉白根次官◉韓山の警報◉合衆國國務卿◉遊説◉西鄉伯◉其類耶非耶◉辨解書◉院外民黨◉愧死◉國民協會◉超然主義取消◉五團躰◉關東會と五團躰◉東京知事◉地方政治◉鐵道會議◉墨西哥國の狀態◉時事日記

一部前金六錢○十二部前金六十六錢

東京市芝公園 **自由黨黨報局**

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版

百人一首講義

正價金廿八錢
郵稅四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて百人一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

發兌元　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌大取次所

- 東京市本町三丁目　瑞穗屋卯三郎
- 同　錦町二丁目　武藏屋藤藏
- 同　尾張町二丁目　東海堂
- 同　彌左衛門町　嚴々堂
- 同　表神保町　東京堂
- 同　出雲町　警醒社
- 同　鐵砲町　指金堂
- 同　元富士町　盛春堂
- 同　雉子町　團々社
- 福岡縣福岡　積善館支店

- 神奈川縣橫濱市　共同新聞發賣會社
- 同　同　万字堂
- 京都佛光寺烏丸　東枝律書店
- 同　新町竹屋町　便利堂
- 大坂本町四丁目　岡島支店
- 同　福音社
- 神戸元町四丁目　福音社
- 函館市　福音社
- 熊本縣熊本　草野門平
- 京都新町二條　大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

- 麴町區上六番町　日盛堂
- 同　三番町　梅仙堂
- 同　福音舍
- 同　飯田町　三文字屋
- 同　洗心堂
- 神田區神保町　松江堂
- 同　青柳堂
- 同　雉子町　大塚書籍店
- 牛込區神樂町　積善堂
- 同　正導舍
- 同　肴町　深田彌兵衛
- 本郷區弓町　文字堂
- 同　就本堂
- 同　富士前町　解明堂
- 同　盛春堂
- 同　二丁目　古河屋

- 下谷區東黑門町　三堂
- 神田區松岡町　山口一次郎
- 同　旅籠町一丁目　榎本
- 同　鍋町　清水嘉兵衛
- 日本橋區本町三丁目　庭花堂
- 芝區櫻田本郷町　鈴木新兵衛
- 同　南佐久間町　栗原
- 同　同　鈴木
- 赤坂區新町　赤川市兵衛
- 同　同　飯田
- 京橋區尾張町　鈴々木
- 同　出雲町　金盛堂
- 同　山田屋
- 本郷區天神町　改進堂
- 神田區小川町　大塚雜誌店
- 同　錦町二丁目　莨故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

女學雜誌第三百二十號より改正仕り同號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も舊號迄の**雜誌代金**至急御拂込相成度候。亦改正致度候間

爲替は**麴町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

冊數	前金	府外
十冊	前金五十八錢	府外六拾三錢
廿六冊（半年）	同一圓四十三錢	同一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同二圓六十錢	同二圓八十六錢

○白赤の內一方講讀の分

冊數	前金	府外
六冊	前金三拾五錢	府外三十八錢
十三冊（半年）	同七拾三錢	同七十八錢
廿六冊（一年）	同一圓三十錢	同一圓四十三錢

一冊金六錢　郵稅金五厘

廣告料及無料廣告

一行	一回	（廿七字詰）	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さ定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY